学びや タイムスリップ

㉞ 西陣織の屏風 （明治時代）

伝統産業息づき 子に伝え

上京区の元西陣小学校（現在は西陣中央小に統合）には機織りの町ならではの歴史資料が所蔵されていました。1892（明治25）年に制作された「西陣織裂貼交屏風」（写真上）は、各織元の名前とともにそれぞれが織った西陣裂を集めて貼った、まさに職人仕事の結晶。華やかで美麗な作品です。

この屏風が作られたころ、西陣の地は活気に満ちていました。明治に入って西陣織の近代化が進み、フランス製のジャカードと呼ばれる文様織の機械の輸入によって、多様な文様や意匠を表すことが可能になりました。

また、西陣の技術は1888（明治21）年、明治宮殿の竣工に当たって大きく発揮されました。皇居用装飾織物の仕事が西陣に発注されたのです。

この仕事は職人たちの大きな自信となり、西陣織が一層発展する契機となりました。地元から学校に寄贈されたこの屏風を見ると、そうした職人たちの自信と誇りが伝わってくるようです。

他にも、室町小、翔鸞小、元成逸小（いずれも上京区）などには大正、昭和期の西陣織裂が貼られた屏風が伝わっています。

また、西陣小の校内には機業をテーマにした大きな絵画作品が飾られていました。1913（大正2）年に上京区の桃薗小を卒業し、菊池契月に師事した日本画家喜多川玲明の作品「機織図」（写真下）には、機業地帯の家内労働の様子が描かれています。桃薗学区に生まれた喜多川が子どものころから日常的に見ていた光景なのでしょう。

他に、下京区の格致小を1926（大正15年）に卒業し、図案集なども多く著した福岡玉僊の作「絲を繰る」などが残っています。

小学校に飾られてきたこれらの作品からは、地域と学校の強い結びつきが感じられます。伝統産業が学びやの中にしっかりと息づき、子どもたちに伝えられてきたことを物語っています。

（京都市学校歴史博物館学芸員　森光彦）

上「西陣織裂貼交屏風」（部分）＝1892年、元西陣小蔵　下喜多川玲明「機織図」（1936年ごろ、元西陣小蔵）